

有為な書写書道教員を養成するためのプログラム開発

— 教育実習と事前事後指導を中心として —

東京学芸大学附属高等学校	荒井一浩
東京学芸大学附属竹早中学校	清水文博
東京学芸大学	加藤泰弘
東京学芸大学	石井健
江東区立深川第六中学校	榎本純子

目次

0. キーワード	38
1. はじめに — 本研究の位置づけ —	38
2. 本研究の役割分担	38
3. 書写書道における事前指導	38
4. 事前指導を振り返って — アンケート結果と分析を通して考える —	41
5. 教育実習で変わったこと — 事後指導レポートから読み取る —	44
6. おわりに — 今後の方向性を含めて —	45

有為な書写書道教員を養成するためのプログラム開発

— 教育実習と事前事後指導を中心として —

東京学芸大学附属高等学校	荒井 一 浩
東京学芸大学附属竹早中学校	清 水 文 博
東京学芸大学	加 藤 泰 弘
東京学芸大学	石 井 健
江東区立深川第六中学校	榎 本 純 子

0. キーワード

書写書道 教員養成 教育実習 事前事後指導 理論と実践の融合 教科指導の専門性

1. はじめに — 本研究の位置づけ —

教育実習生を受け入れる立場から見ると、学生は不安や焦りを大きく抱いているものの、それを解決する手だてを明確には持ち合わせてはいないと感じられる。不安の源泉は大きく分けて2点に集約される。まず一つには、授業をうまく組み立てられるか、そしてスムーズに進めることができるかということである。もう一つは生徒と適切なコミュニケーションが図れるかどうかということである。本研究では、主に前者を課題として捉え、その改善を図ることを考える。

大学では、内容学や教科教育など考えられたカリキュラムが組まれているはずだが、その成果が教育実習において効果的に機能しているかという疑問を感じる。教育実習生は理論を学び、実技を学んできた。しかし、個々の知識が備わり、技量が向上しているとしても、いわゆる「授業で使える」段階に到達していないのではなかろうか。換言すれば、「授業で使う」ことを念頭に学習を進めてきたことが乏しく、自らの知識の増加、技量の向上を図ることだけがそのまま授業力を培うことに直結すると思いをこんでいるのではなかろうか。

そこで、書写書道という科目や領域の特色を踏まえての教員養成のあり方を再考することが必要だと考えた。

2. 本研究の役割分担

本研究は附属学校と大学、そして公立学校との共同研究として行った。その方向性と理論構築は大学の加藤、石井と事前事後指導を担当する荒井が行い、アンケートやレポートの分析と考察は清水、榎本と荒井が行った。全体調整とまとめは荒井が行っている。

3. 書写書道における事前指導

3. 1. 中等教育教員養成課程（B類）における教員養成

書道に関する課程は、B類とG類に置かれているが、教育系であるB類の概要を確認しておきたい。公開されている学部紹介の中から引用する。（傍線は筆者）

<ポイント1>伝統と歴史ある書道（書写）教育を行っています

書道専攻は、当初高校の書道教員の養成を目的として設置され、その後中学校・高等学校教員の養成を目的とする専攻として今日に至っています。50年以上にわたって全国の書道教員や小・中学校の教員（書写）

を養成しています。

<ポイント2>実践的な書道（書写）教員を養成します

本専攻は、先駆的・先導的な教育内容と実践力をモットーにして、書道や書写の授業研究会に参加しながら、より実践的な指導力を養います。数多くの卒業生が時代をリードする高校の書道教員や国語科書写担当教員として、全国的に幅広く活躍しています。

<ポイント3>基礎から専門まで幅広いカリキュラムを用意しています

高等学校の書道教員や中学校（小学校）の国語教員の育成を目指して、1・2年次では基礎的な書道（書写）教育の理論と指導法を学び、3・4年次ではさらに専門性を深めた知識や技能を身につけます。漢字の書や仮名の書の臨書や創作などの表現と鑑賞、また、漢字仮名交じりの書の表現と鑑賞など、特に高等学校の書道の教員としての資質や能力を確実に身につける教員養成のカリキュラムを用意しています。

<ポイント4>個に応じた多様な進路が選択できます

進路は、高等学校・中学校の教員を目指す学生が大半ですが、履修の仕方によっては小学校の教員を目指すことや大学院に進むことも可能です。また、小・中学校の書写の実践者として力をつけ、新しい書写書道の実践者や研究者となる選択肢もあります。自己の適性を見極めながら教員とよく相談して進路を決定しましょう。

この中では、<ポイント2>と<ポイント3>にある「先駆的・先導的な教育内容と実践力」「実践的な指導力」「基礎的な書道（書写）教育の理論と指導法」「専門性を深めた知識や技能」がキーワードとなろう。「実践力」を高めていくには、充実した教育実習が不可欠であり、充実した教育実習を過ごすにはその事前指導を中心にして「実践力」を意識した授業展開がなされなくてはならない。そのために、以下の2つの観点を見だし、それを有為な書写書道教員を養成するための重要なポイントとして意識することとした。

3. 2. 理論と実践の融合という観点

前述のキーワードは、言葉こそ違えいずれも理論と実践の融合を意図したものと捉えることができる。理論は実践を組み立てていくにあたってなくてはならないものである。学校教育が置かれている立場、科目や領域の理念や存立意義、他の教科目との関連から個々の学習内容の系統的な理解まで、理論的背景無しに実践は生まれにくいといってもよい。しかし、多くの学生はこのことを本当には理解していない。なぜなら、実践と聞いてまず思い浮かべるのは自らの学習体験だからである。自らが中学校、高等学校で学んでいた当時の記憶は、彼らにとってある程度鮮明なものとして残っている。そこで、実践と聞くと、自らの学んだ授業の光景を思い浮かべ、「～を学習した」「～をやった」というような背景を伴わない学習項目だけが想起される。彼らの指導者が理論的背景を持ってその実践を組み立てていたとしても、当時学習者であった彼らはその表面だけを記憶しており、いざ指導者側の立場に立たなくてはならない時にも、理論と実践を結びつける力が弱くなってしまっていると考えられる。それまでに学んだ理論と実践が融合して初めて効果的な授業が展開できることを示していかななくてはならない。

3. 3. 教師の専門性という観点

教師が専門職であるということは、昨今よく言われている。では、その専門性とはいったい何を指すのであろうか。もちろん、広義の専門性には、生徒指導や学校運営、研究能力など様々に捉えることができようが、ここでは教科指導に限定して考えることとする。つまり、授業実践力やカリキュラム開発力である。ただ単に学生に「専門性とは？」という問を出すと、「古典について多くの知識を有していること」「巧みな毛筆運用能力を有していること」のごとき回答がある。「教師の」という冠を強調すると「指導技術」に関する返答がある。

しかし、ここでは「知識や技能」と「指導技術」を結びつける力を有していることを、専門性と位置付けていきたいと考える。授業とは何かを理解し、知識や技能をどのように授業という場で生かしていけばよいのかが分かること、そのために工夫したり、評価・改善を図ったりすることができることが求められる。その結果、現実的な学習指導案を作成できることが必要となる。

3. 4. 授業計画（シラバス）

3. 2. および 3. 3. の観点を意識し、授業を構想した。平成21年度の事前・事後指導の授業計画を示す。

2009. 4. 16

平成21年度 中学校・高等学校 教育実習「事前・事後の指導」授業計画

木曜日1限 担当：荒井一浩

実施教室：書実Ⅲ

	テーマ	内容	期日	担当
1	オリエンテーション	教育実習の意義と目標	4月16日	荒井一浩
2	共通講義Ⅰ	学校教育の諸相	4月23日	センター教員
*附属高等学校遠足のため休講			4月30日（木）	
3	授業設計の基礎	学習指導要領を読む	5月7日	荒井
4		授業と基本的学習指導過程	5月14日	荒井
5		教材研究と授業研究	5月21日	荒井
6		学習形態と教材（学習材）	5月28日	荒井
7		学習評価	6月4日	荒井
8		学習指導案作成の要諦	6月11日	荒井
9	実践研究	模擬授業Ⅰ（中学校）	6月18日	荒井
10		模擬授業Ⅱ（高等学校）	6月25日	荒井
*附属学校での基礎実習オリエンテーション			6月26日（金）	
11	実践研究	模擬授業Ⅲ（中学校）	7月2日	荒井
12		模擬授業Ⅳ（高等学校）	7月9日	荒井
13	共通講義Ⅱ	教育実習の心得	7月16日	センター教員
14	実習に向けて	夏季休業中の有効な過ごし方	7月23日	荒井
*附属学校での基礎実習			9月～10月・3週間	
15	研究課題の整理	基礎実習の報告と検討	未定	荒井

☆「4月23日」と「7月16日」は教育実践研究支援センター・教育実習指導部門主催の共通講義です。

第1回のオリエンテーションで、教育実習とは何か、そこで何を学ばなければならないのかを明確に意識させるようにした。講義の前半では、理論を中心に、授業を設計するに当たって不可欠と思われる各論を毎回テーマを変えて取り上げるようにした。そして、後半では模擬授業を中心として前半で学んだ事柄が、実際の授業でどのように生かされていくのかを実感できるよう配慮した。事後指導においては、各配属校で課題とされていることを全体の共通認識として取り上げ、ディスカッションを経た後、各自のレポートとしてまとめることとした。

4. 事前指導を振り返って — アンケート結果と分析を通して考える —

4. 1. 事後指導を利用したアンケートの実施

事前指導の成果を学生がどのように感じ取っていたかを検証するために、アンケートを実施した。アンケートは無記名、サンプル数は24である。以下にアンケートの項目を示す。

Q 1 教育実習の事前指導で役に立った講義はどれですか？（複数回答）

- 教育実習の意義と目標
- 学校教育の諸相（共通講義）
- 学習指導要領を読む
- 授業と基本的学習指導過程
- 教材研究と授業研究
- 学習形態と教材（学習材）
- 学習評価
- 学習指導案作成の要諦
- 模擬授業（中学校）
- 模擬授業（高等学校）
- 教育実習の心得（共通講義）

Q 2 教育実習の事前指導であまり役に立たなかった講義はどれですか？（複数回答）

- 教育実習の意義と目標
- 学校教育の諸相（共通講義）
- 学習指導要領を読む
- 授業と基本的学習指導過程
- 教材研究と授業研究
- 学習形態と教材（学習材）
- 学習評価
- 学習指導案作成の要諦
- 模擬授業（中学校）
- 模擬授業（高等学校）
- 教育実習の心得（共通講義）

Q 3 教育実習の事前指導でもっとも役に立った講義を一つ挙げるとすると何ですか。

Q 4 教育実習の事前指導でもっとも役に立たなかった講義を一つ挙げるとすると何ですか。

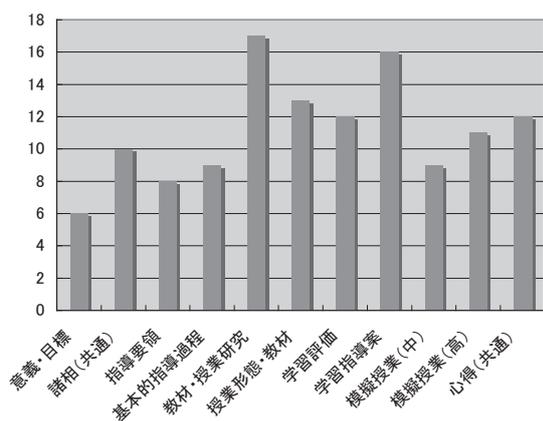
Q 5 教育実習に行って、困ったことは何ですか？（箇条書き・自由記述）

（もっとも困ったことの冒頭に○印を付けてください）

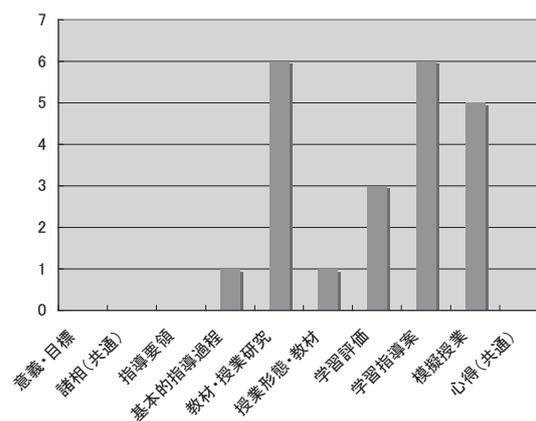
Q 6 教育実習の事前指導で、このようなことをして欲しかったということがあれば、書いてください。（自由記述）

Q 7 応用実習に向けて、どのようなところに重点をおいて指導して欲しいと思いますか？（自由記述）

Q 1～Q 4では、事前指導がどの程度、学生に受け入れられたか、そして学生の関心がどこに向いているかを捉えようとした。集計し、グラフ化すると次のようになった。



<Q 1>役に立った (複数回答)



<Q 3>もっとも役に立った

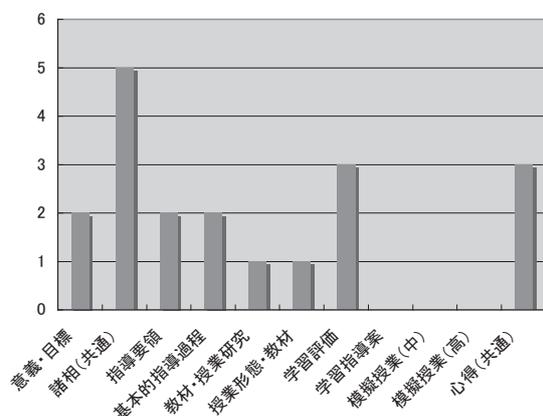
Q 1、Q 3 とも「教材研究と授業研究」「学習指導案作成の要諦」が高い値を示した。「教材研究」は 2 年後期に配当されている書道科教育法でも多く取り上げられており、学生の関心は高い。しかし、「教材研究」＝「教材についての知識をつける」としか捉えていない学生も多く、本当にやるべき教材研究に方向性が定まっていつているのかの判断はなかなか難しい。授業後の学生のコメントをいくつか載せる。(傍線は筆者)

- ・今まで教材研究と言われても教材を研究するだけ？と考えていましたが、今日の授業で深まりました。ただ、漠然と教材の知識を習得するだけでなく、その適否を考えたり、構成したりと、非常に重要なことだと分かりました。
- ・前回の授業で散々「授業では第一に学習者にどう変わって欲しいかを考える」と学んだにもかかわらず、まだ第一に「教材集め」や「何を教えるか」という指導者側の考えしか持てないことにとっても反省した。学習者を主体とする考えを自分に植え付けなければ前に進めないで、その考えを絶対に自分にさせる。
- ・授業は生徒が主体である。なのだから、教材研究も「生徒が学ぶ」という視点に立つ。大切なことなのに、今日改めて気づかされました。教材研究の際に全体の位置づけを考えると、期待する生徒の変容を考えて行うことが大切なのですね。

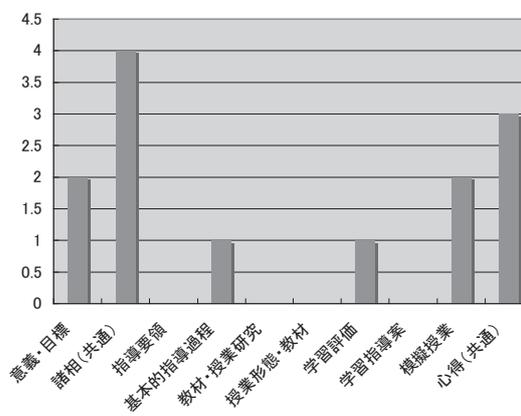
コメントにもあるように、学習指導要領や基本的学習指導過程等を通して「学習者主体」「授業を行う目的」を明らかにしてきたにもかかわらず、定着を見ていない。見方を変えると、概括的、一般論的な話しでは分かったつもりになっていた事柄が、書写書道の事例を交えて考えたときに初めて感得されたといつてもよいかも知れない。「学習指導案作成の要諦」の授業後のコメントを挙げる。(傍線は筆者)

- ・生徒を中心に、どのように変化していくかを重視しながら作成していく必要があると改めて思いました。授業の全体の流れを考え、一つ一つどんな意味があるのか考えることも大事だと分かりました。
- ・指導案の指導計画の語尾表現の考え方は「生徒の視点に立つこと」が基本となっているというお話しにとっても納得した。今まで、「これはこう書かなければならない」とい形式だけ教わってきたが、今回のお話しのように理由も知ることができれば、形式も自然と身に付くのではないかと思う。
- ・「指導案は作成したところがスタートであり、授業を行う中でも訂正していき、次の授業で生かしていく」ということに初めて気づかされました。指導案作成についての文末表現は難しいけれどとても大切だと感じました。特に、生徒の学習活動で、生徒の変容を予想した（～に気づく）（～がわかる）（～できる）など、私も（～する）だけになりがちであったと今日気づかされ、気をつけていこうと思いました。
- ・今日の講義を受講し、もっとも印象的であったことは、同じ机間指導であったとしても、行う場面・場合によって大きく異なるということです。学習指導案を組み立てる際、文末表現や机間指導の仕方などについてしっかり吟味し、書けるようにしたい。

これらの学生の反応は、学校教育の理念や授業というものに対する考え方が定まっていないことを示しているのではなからうか。「学習者主体という視点で授業というものを考えていこう」と繰り返しているにもかかわらず、いざ学習指導案となると指導者側での見方しかできていない者が多い。授業設計の基礎と位置づけ、取り上げてきた多くの項目、例えば学習形態や学習評価等が、本来最も大切に考えるべき学習者に向かっていることは深く反省する必要がある。



<Q 2>あまり役に立たない (複数回答)



<Q 4>もっとも役に立たない

無記名ではあったが、やはり役に立たないとする回答は少なかった。しかし、その中でも理念や理論的な部分が多くを占める講義については必要性を感じていないと見られる傾向が読み取れた。その反面、実践に直結すると捉えられている学習指導案の書き方や模擬授業に対する回答はあまり見られなかった。「もっとも役に立たない」講義に模擬授業を挙げたものが2名いたが、いずれも模擬授業の必要性を認めていないわけではなく、実際に行った授業とのギャップを挙げたものであった。

こうしてみると、理論と実践の融合を意識したものの、その成果が上がっているとは捉えられない。学生自身にその意識が希薄であることとともに、指導者も理論と実践を融合した授業ができていないと考えられる。理論的な講義が主体となる場合でも、より積極的に実践的な部分と組み合わせた授業展開を図る必要がある。また、現実には難しいことかもしれないが、早期の段階で要点を押さえた授業観察ができれば、理論と実践の融合は進むのではないかと考えられる。そして、講義の後半に実施している模擬授業をより現実的、実践的なものにしていく工夫が求められる。

<Q 5>の回答

- ・発問したとき、生徒からの反応がない。
- ・時間通りに授業が終わらない。
- ・生徒たちとの会話で、おとなしい生徒との会話が続かない。
- ・指導案を見ていただける機会が少なく、限られていたため授業のぎりぎりになってしまった。
- ・授業を行うときに極度に緊張したこと。
- ・研究授業でかなり時間が足りなかったこと。
- ・学習指導案を作る時間があまり無かったこと。
- ・先生方が忙しくあえる時間が限られていること。
- ・教材研究が不足していたこと。
- ・自分の意図が伝わらず、全員の注目を集めることができない。
- ・評価の設定を具体的に書けといわれたが難しかった。

- ・模擬授業の経験もなく、授業をすること自体が不安でいっぱいだった。
- ・中学三年生が実習生の授業は分かりづらいといやがっている場面を見たが、どうしようもなかった。

<Q 6>の回答

- ・授業展開だけでなく、教材観や生徒の実態の部分についての学習指導案について、もう少し触れて欲しい。
- ・板書の仕方のポイントなどの指導があったらよかった。
- ・模擬授業から学ぶことが多いので、難しいけれど、全員が一度、模擬授業を体験できればよかった。
- ・過去の書道の実習生の授業映像を見ておきたかった。

<Q 7>の回答

- ・生徒理解。こんな生徒にはこう対応するなどという生徒と指導者の関係。
- ・授業作りについて。教材研究をどのようにすれば、授業で有効に生かすことができるのか。

<Q 5>から<Q 7>は自由記述であったので、その記述量に差異がある。しかし、通して感じられるのは、発問の設定や指示を的確に伝えられないなど、指導技術にもその原因の一端を求められるものもあるが、多くは「知識や技能」をどのように授業という場で生かしていけばよいのかという方法論の欠如と認識してよいものと考えられる。「知識や技能」と「指導技術」を結びつける教科指導の専門性を意識して取り組んできたが、必ずしも成果を挙げているとは言い切れないという結果となった。もちろん、こうした教育実習生の悩みは経験によって解決に向かうことも多いであろう。しかし、教育実習期間は短い。経験知として蓄積されることを待っていたのでは充実した教育実習は望めない。より具体的に専門性を考えていくことで少しでもよい指導に結びつけたい。

一方、評価規準の具体的な記述の仕方や教材観、指導観、生徒観といった部分への対応、板書の効果的な方法等より力を入れて指導することが必要ではないかと気づかされることもあった。また、模擬授業の充実など学生の求めている方向も見出すことができた。

5. 教育実習で変わったこと — 事後指導レポートから読み取る —

事後指導においては、各配属校からの実習報告とそれを踏まえてのディスカッションを行い、最後にレポートを課している。レポートは、基礎実習の3週間で自分自身がどのように変化したか、その原因は何であったのかを明確にすることを求めている。例を挙げて、考えてみたい。(傍線は筆者)

<教育実習生事後レポートA>

私がこの3週間で気付き、一番大切だと感じたのは「常に生徒の視線から授業を考える」ということだ。実習前、そして初授業をするまで、どう教えるか等、教える側の視線からしか物事を考えていなかった。しかし、模擬授業をしたり友達の授業を参観したりして、配布プリントをはじめ、黒板の書き方やチョークの色、声の出し方など一つ一つの細かなことも、授業の雰囲気作りに影響を与えていることを知った。このことは、友達の授業を教室の後ろで参観し、生徒の反応を見ているとよく分かった。例えば、配付資料については高校生にとっては難しい内容で、プリントにどう記入してよいか分からないものだった場合、生徒の目は徐々にプリントから離れ、興味を示さなくなってしまう。また、板書の方法も自分では大きく書いているつもりでも、色が見づらいものであれば、大きく書いても何の効果もない。声についても、強弱をつけたりして単調にならないことで、生徒に聞いてもらう環境作りをする。このように、生徒の興味・関心を引きつけ、それを最後まで持続するには、単におもしろい授業をするだけでは意味がない。ましてや、書道は実技科目なので、不得意の人にとってはとても退屈な授業となってしまう。そのようなことを考慮すると、やはり生徒の視線に立つことは非常に大切であると思う。不得意だと感じている生徒にも、書道は楽しいと思って欲しい。そのために、自分がどの場面でどう行動し、授業で何を中心にやるかはとても重要だと思う。(後略)

この事後レポートを見て、従前と大きく異なるのは、自己分析が相当具体的になっているということだ。「生徒主体」に気づいたということは今までと同様であるが、それに至った原因を細かく考えることができていると思う。これはこれで、教育実習を経た大きな成果と考えることができようが、事前指導の改善を図るという観点からすれば、こうした具体的な自己分析で記述できるようになったことを、事前指導で一つでも二つでも克服していくことが求められるであろう。

<教育実習事後レポートB>

(前略)そして、初回の授業を終え、教えるということは説明するということとは違うということを知った。また、授業をして、生徒がどう感じるか、そこまで考えるのが教材研究なのだということを知った。そのため、自分が知識ばかりを増やすのではなく、どのように話をしたら伝わるのかどのような授業形式にするのか、それをしっかり考えなければならないのだと感じた。(中略) 教材研究をしっかりとして授業を行っていけば、自分の過去の経験に頼ることなく、自分のオリジナルの授業ができるのではないかと思う。(後略)

教材研究に対して、より深く考えることができるようになってきているようだ。これも経験して分かることといえばそうなのだが、大きな進歩である。「教える」と「説明する」ことの相違を考えたり、教材研究を授業形態や発話と関連づけて考えたりすることが事前指導の中でより早く、より確実に進めることができれば、アンケートで明らかになった困惑を少しずつ減らしていくことができるだろう。

6. おわりに ―今後の方向性を含めて―

事前事後指導や教育実習のあり方を探ることによって、その改善を図ることを目的に研究を進めてきた。そして、検討と考察を踏まえて次のように考えた。

- (1) 基礎実習の直前に配当されている事前事後指導では、より実践的な取り組みが必要ではないか。
- (2) 理論的な部分については、2年次までの書道科教育法で充実させておくことが大事ではないか。
- (3) 事前事後指導においては実践を通して理論を検証していく姿勢が有効ではないか。
- (4) 実践の感覚をつかむためにも早期の授業観察とより実践的な模擬授業が不可欠ではないか。
- (5) 実践的な学習指導案を作成する機会を多く持つことが必要ではないか。

今後は、こうした要素をより具体的に授業に反映できるよう、授業計画の再検討を行っていくことが大切だ。事前指導でより多くのことに気づき、よりよい授業を行う手だてが理解できれば、教育実習生の不安や焦りも軽減し、基礎実習が豊かで実りあるものに変わっていくと期待したい。